

Ecohistory Program

文明環境史領域プログラム

H

プログラム主幹 ● 佐藤洋一郎

このプログラムでは、「循環」「多様性」「資源」など、いわば本題ともいうべき地球環境問題を時間の軸から検討します。というのも、どんな問題(あるいは現象)にも歴史があるからで、言い尽くされた語ではありますが、「温故知新」の大切さを強調したいと思います。また地球研のミッションが、地球環境問題の解明と解決の道筋の提示にあることを考えると、このプログラムの使命は文明規模のタイムスケールから未来を考え、「未来社会」のデザインを描くことにあります。

このプログラムに加わっているプロジェクトには、終了プロジェクト (CR) では「水資源変動負荷に対するオアシス地域の適応力評価とその歴史の変遷」(リーダー：中尾正義)、現在進行中のプロジェクト (FR) では「農業が環境を破壊するとき——ユーラシア農耕史と環境」(リーダー：佐藤洋一郎)、「環境変化とインダス文明」(リーダー：長田俊樹)、「東アジア内海の新石器化と現代化：景観の形成史」(リーダー：内山純蔵)の3本があります。

これらが扱う時間のスケールやターゲット地域はさまざまですが、「Asian Green Belt」「Yellow Belt」という、水条件について対照的な2つの地域の環境史を扱っています。両地域は、一方は1万年近く曲がりなりにも持続的発展を遂げてきた地域、他はすでに破綻した地域と見られてきましたが、それは本当でしょうか。2つの地域における生産性や持続性の違いはどこにあるのでしょうか。人類の未来可能性を考える上で不可欠なこうした根本的な問いかけに答えていきたいと思います。

終了プロジェクト	プロジェクトリーダー	テーマ
H-01 (CR)	中尾正義	水資源変動負荷に対するオアシス地域の適応力評価とその歴史の変遷
本研究	プロジェクトリーダー	テーマ
H-02 (FR5)	佐藤洋一郎	農業が環境を破壊するとき——ユーラシア農耕史と環境
H-03 (FR4)	長田俊樹	環境変化とインダス文明
H-04 (FR4)	内山純蔵	東アジア内海の新石器化と現代化：景観の形成史

農業が環境を破壊するとき ——ユーラシア農耕史と環境

本プロジェクトでは、ユーラシアにおける3つの農耕風土、「ムギ農耕圏」、「モンスーン農耕圏」、及び「根栽類農耕圏」における農業と環境の関係史を学際的視点から捉えなおし、それに基づき未来における農業のあり方を考えます。とくに「遺伝的多様性」をキーワードとする「1万年関係史の構築」をはかり、未来の農業のあり方を考えるよすがとしたいと思います。



プロジェクトリーダー
佐藤洋一郎 総合地球環境学研究所副所長・教授
1952年和歌山県生まれ。京都大学大学院農学
研究科修士課程修了。農学博士。2003年より
現職。専門は植物遺伝学。遺跡から出土した
炭化米にDNA分析の手法を応用し、稲作の起
源・伝播の解明に取り組んでいます。著書に『よ
みがえる緑のシルクロード』(岩波ジュニア新
書)など多数。

コアメンバー
石川隆二 弘前大学農学生命科学部
WILLCOX, George フランス東洋先史学研究所
加藤謙司 岡山大学大学院自然科学研究科
木村栄美 総合地球環境学研究所
鞍田 崇 総合地球環境学研究所
篠田謙一 国立科学博物館人類研究部
JONES, Martin ケンブリッジ大学考古学部

田中克典 総合地球環境学研究所
辻本 壽 鳥取大学農学部
中村郁郎 千葉大学大学院園芸学研究所
原田信男 国士舘大学21世紀アジア学部
細谷 葵 総合地球環境学研究所
MATTHEWS, Peter 国立民族学博物館

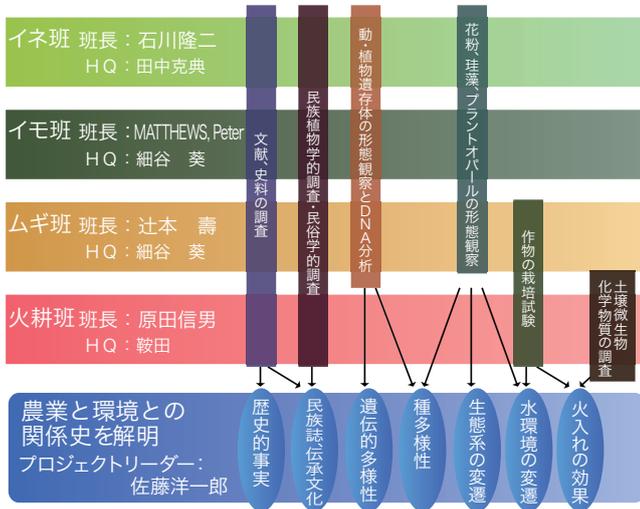
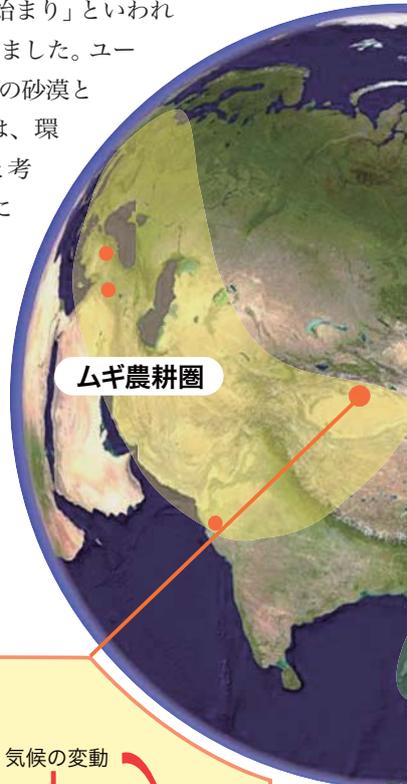


図1 各班の研究手法

研究の目的

農業は「その始まりが環境破壊の始まり」といわれるほどに生態系を大きく改変してきました。ユーラシアの風土をみると、中央アジアの砂漠と東南・東アジアのモンスーンとは、環境が変動した程度が大きく異なると考えられます。こうした風土の違いによる環境の変動を、1万年にわたる農耕史と関連させて把握しようというのが本プロジェクトの目的です。とくに「種多様性」や「遺伝的多様性」の喪失をとまなう環境の変動あるいは破壊に基づいて、農業と環境との関係史の総合的理解をめざします。本プロジェクトでは、ユーラシアにおける3つの風土



新疆ウイグル自治区・小河墓遺跡



写真1 小河墓遺跡全景 (2008年)
砂漠車にゆられること8時間、ひっそりとたたずむ遺跡に墓標がそびえ立っていました



写真2 遺跡から出土した材 (2007年)
材は墓標、棺などしばしば遺跡で見られました



写真3 遺跡から出土したコムギ (2005年)
ミイラの副葬品として埋葬されており、非常に残存状態が良いコムギでした



写真4 遺跡周辺の景観 (2006年)
塩が集積しているため、地表が白くなっています

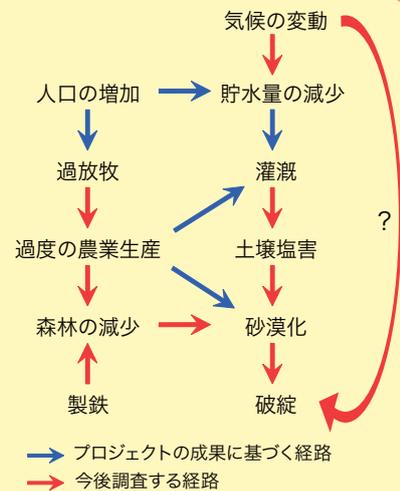


図2 小河墓遺跡の連関モデル

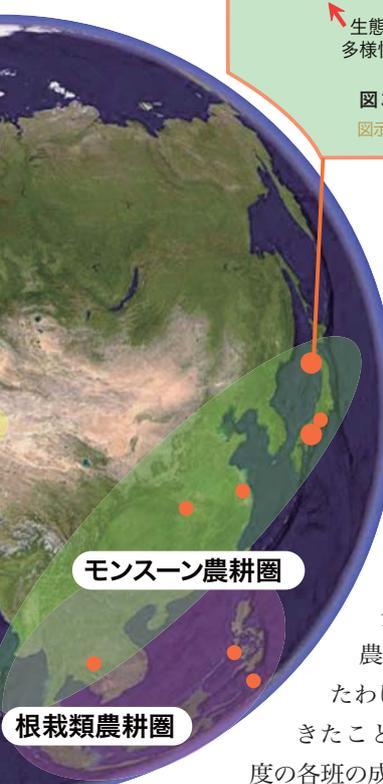
大阪府・池島・福万寺遺跡

写真5 洪水の痕跡とみられる砂礫層の堆積
(大阪府・池島・福万寺遺跡, 2007年)
農耕活動は断続的な破綻を繰り返しながら進んできました

図3 池島・福万寺遺跡における連関モデル
図示は図2と同じ

人口増 → 常畑 → 刈敷 → 地力低下 → 植物利用システム狭小化 → 生態系の多様性低下 → 休耕 → 洪水 → 水路の敷設 → 乾燥 → 井戸

常畑 ← 島島 → 牧? → 開発 → 森林破壊? → 多雨 → 洪水 → 品種選択 → 島島



(ムギ農耕圏、モンsoon農耕圏、根栽類農耕圏)の農耕史を解明する3つの班(ムギ班、イネ班、イモ班)と、各班の成果を踏まえながら、焼畑をモデル事例として現代そして今後の農耕のあり方を探る火耕班を基軸として研究に取り組んでいます。

主要な成果

これまで取り組んできた自然科学分析や史実調査により(図1)、人類の農耕活動は右肩上がりに増産を重ねてきたわけではなく、頻繁に破綻を繰り返してきたことが明らかになってきました。2009年度の各班の成果は以下のとおりです。

- **ムギ班**: 中国・新疆ウイグル自治区の小河墓遺跡から出土した動植物遺存体の形態観察やDNA分析により(写真1, 2)、現在は砂漠が広がる地域でも、大規模な小麦畑(写真3)、牧草地や森林といった「牧場」の風土が存在した可能性があることを明らかにしました。また、花粉分析により湿地があったことも考えられました。遺跡周辺(写真4)が一変したモデルとして、「農業→塩害→放棄」の過程が繰り返されたと考えられました(図2)。
- **イネ班**: 日本の遺跡(大阪府・池島・福万寺遺跡他)の調査から、災害(洪水(写真5)、旱魃)への前後対応として、新品種の導入(農学的適応)、栽培場所の選定、耕作法の変更(島島の開発)、水利の調節(水路の敷設、大和川の付替え)がありました。また、水田耕作が時折中断していた可能性も考えられました。つまり、日本の農業は破

壊と再生を繰り返しながら歩んできたことが考えられました(図3)。

- **イモ班**: フィリピンの調査でタロイモの準野生種が新たに見つかり、初期根栽類農耕が行われていた場所を再考するデータが得られました。
- **火耕班**: 従来の民俗学的アプローチに加えて、石川県旧白峰村(現白山市白峰)において、土地利用関連文書(江戸時代)の調査に着手し、公式の石高には加算されず不明であった焼畑の歴史の実態を解明しつつあります。また「第3回焼畑サミット」を大分市内で開催し、わが国における現代の農業問題、特に中山間地域問題との関わりから、当プロジェクトで進めている焼畑研究の意義づけを試みました。

主な成果の公表

- 2007年6月～2010年3月 全28回「環境思想セミナー」(地球研)
- 2008年5月～2009年4月 連続公開講座(全12回)、「ユーラシア農耕史—風土と農耕の醸成—」(同志社大学他)
- 2008年12月～2010年1月 『ユーラシア農耕史』(全5巻、地球研ライブラリー⑦、臨川書店)
- 2009年8月「第2回国際植物考古学シンポジウム」(地球研)
- 2009年11月 第3回焼畑サミット「よみがえる『農』と暮らしのかたち」(大分県)
- 2009年11月 International Symposium on Wild Rice 2009(タイ・バンコク)
- 2009年12月 シンポジウム「アジアの焼畑から何が見えるか」(国士館大学)
- 2010年3月 シンポジウム「タクラマカン砂漠の環境3000年—小河墓・桜蘭・そして今」(京都大学・稲盛財団記念館)
- 2010年3月 『The Archaeobotany of Early Rice Agriculture in Asia (Journal of Anthropological and Archaeological Science Vol 2-1)』(Y.-I. Sato, L.A. Hosoya & D. Q Fuller eds, Springer)
- 2010年3月 『ムギの自然誌』(佐藤洋一郎・加藤謙司編、北海道大学出版)

今後の課題

ユーラシアのそれぞれの風土における農耕と環境の関係史の解明を通して得られた知見をベースとして、将来の農業とそれに根ざした生活文化のあるべき姿を考える手がかりを明確にしていくことが、最終年度の課題です。

■ ムギ・イネ・イモの3つの班では、それぞれのフィールドにおける生産方式や周囲の生態系におきた変化、栽培植物に見られる遺伝的多様性の変動について、暫定的に立案した農耕と環境の連関モデルに内包させた各要素を検証していきます。

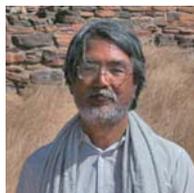
■ 火耕班では、焼畑が農業と社会の近代化の中で衰退していったプロセスを解明し、今後の農と暮らしの姿を考える上で焼畑がもつ現代的意義の再考を進めていきます。

これらの成果については、今年度秋に国立科学博物館で開催予定の企画展において一般に向けて発信するとともに、いくつかの学術出版を通じて公開することを予定しています。

● 調査地域

環境変化とインダス文明

人類は誕生以来、自然環境と対峙しあるいは折り合いをつけながら、持続的な食糧供給を可能とする集約的な生存空間をうみだしてきました。四大文明の一つであるインダス文明(紀元前2600年-1900年)は、インダス印章/文字、城塞、下水道施設などで知られており、その遺跡は、インダス川流域だけではなく、ガッガル川沿いやインド西部のグジャラート州など68万Km²にわたってひろく分布しています。この文明は、同時期の他の古代文明とことなり、都市文明期が約700年とは長く続きませんでした。本プロジェクトでは、環境変化を中心にインダス文明が短期間で衰退した原因を解明し、長期的な環境変化が文明に及ぼす影響をあきらかにすることによって、現代の環境問題の解決に資することをめざします。



■プロジェクトリーダー

長田俊樹 総合地球環境学研究所教授
1978年に初めてインドに行き、以後、インドの少数民族ムンダ人の言語と文化の研究を行っています。2003年の地球研赴任後はインダス・プロジェクトを立ち上げ、30年間に上インドに関わって現在に至っています。

■コアメンバー

宇野隆夫 国際日本文化研究センター
大田正次 福井県立大学生物資源学部
大西正幸 総合地球環境学研究所
後藤敏文 東北大学大学院文学研究科
齋藤成也 国立遺伝学研究所

前李英明 広島大学大学院教育学研究科
KHARAKWAL, Jeewan Singh インド・ラージャスターン大学
MALLAH, Qasid パキスタン・カイルプル大学
MASIH, Farzand パキスタン・パンジャーブ大学
SHINDE, Vasant インド・テカン大学

研究の目的

古代の環境問題は現在世界的に関心が高まっています。過去の文明の衰退原因を分析し、現在の文明社会に注意を喚起する研究は各国で行われています。本プロジェクトでは、インダス文明に焦点をあて、その社会構造と文明をとりまく自然環境を理解し、その衰退原因を解明することをめざし、古環境研究グループ、物質文化研究グループ、伝承文化研究グループ、生業研究グループにわかれて、学際的研究を行っています(図1)。

現在、それぞれの研究グループは、インダス文明の衰退原因と考えるガッガル川の流路変化、グジャラート州沿岸部の海水準変動、降水量や気温の変化などの気候変動、古地震などのトピックに、別々の角度からとらえています(図2)。このように、インダス文明期に想定される環境変化を検証し、その規模と影響の解明をめざすとともに、当時のインダス文

明社会、とくに、都市の発展を支えたと考えられる各地域の生業システムやメソポタミアなどとの交易を復元し、環境変化によるそれらへの影響を総合的に解明します。また、研究を通じて南アジアにおける環境変化の長期的なデータを提供し、現代の環境問題の解決に貢献します。

主要な成果

昨年度は、自然環境の変化をめぐる研究に大きな進展がありました。とくにインダス文明地域の気候変動を調査するため、古環境研究グループを中心にネパールのララ湖において、ボーリング調査を行い(写真1)、約7,500年前から現在までをカバーするコアの採取に成功しました。これは長期間におよぶ気候変動を知る上で重要なデータであり、今後の分析が期待されています。

また、ガッガル川については、現地踏査や衛星写

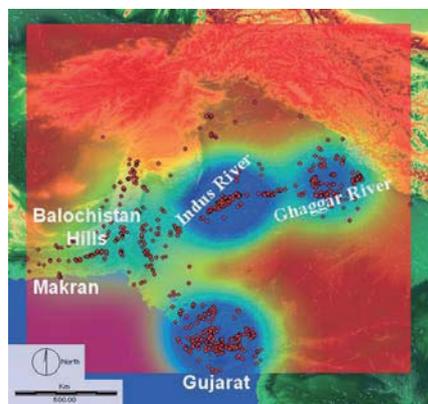
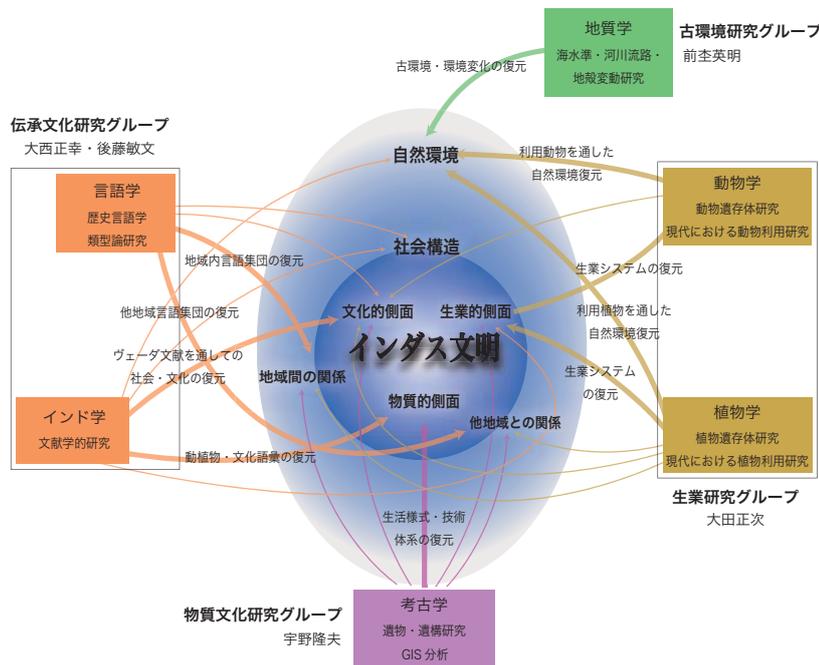


図2 インダス文明の遺跡分布と遺跡の集中地域
インダス文明期の遺跡は、インダス川沿いだけでなくガッガル川やグジャラート州沿岸部に集中しているほか、マクラン海岸やバルチスタンにも分布しています。プロジェクトでは、遺跡集中地域に焦点をあて、当時の環境変化の解明をめざしています



写真1 ララ湖でのボーリング調査風景



写真2 ファルマーナー遺跡墓地
保存状態のよい人骨が多く発見されました



写真3 カーンメール遺跡出土ペンダント
表面にインダス印章の印影があり、裏面にはそれぞれ異なるインダス文字が刻まれています

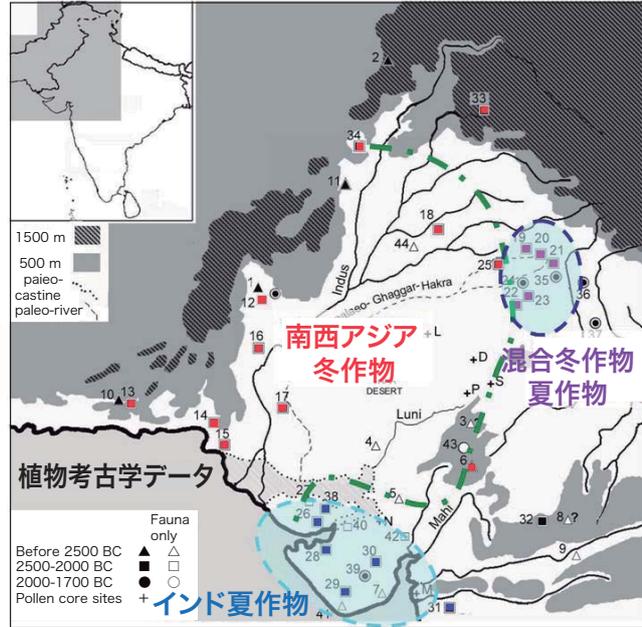
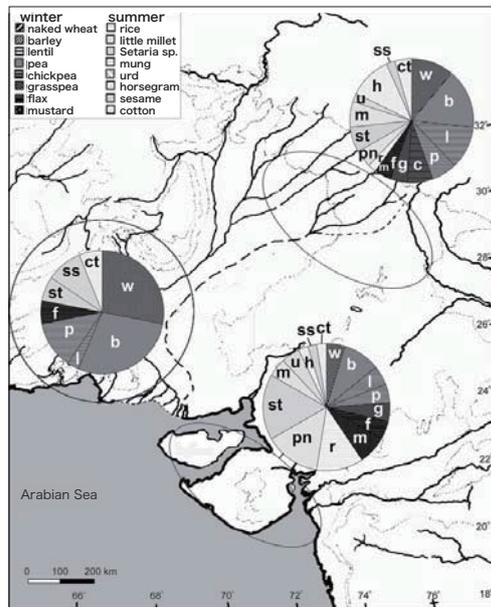


図3 インダス文明期の栽培植物の分布

左: Fuller and Weber (Unpublished) に基づく。円グラフのアルファベットは、左上の作物名の頭文字を表す。右: Fuller 2006の図を一部改変

真によって河道を復元し、その流路変化の要因や時期について調査を実施し、『リグ・ヴェーダ』の記述から想定されるような大河ではなく、モンスーン期に水が流れる程度の川だったことがわかりました。これは大河に依拠しない文明という新たな視点を提供しています。プロジェクトで発掘したファルマーナー遺跡はこのガッガル川沿いに位置しています。

さらに、グジャラート州沿岸部の海水準変動については、現地踏査や衛星写真による地質・地形学的データと、カーンメール遺跡の発掘データを統合・分析しています。これまでの研究でこの地域の海水準は現在よりも2mほど高かったという分析結果がでており、今後さらなる検証を行う予定です。この地域はメソポタミアとの交易拠点であったと考えられ、これについては楔形文字資料からも研究を行っています。

物質文化研究グループによるインドの2つの遺跡発掘調査はすでに終了し、インダス文明期の遺構や遺物、動植物遺存体等が発掘され(写真2、3)、現在これらのデータ分析が進んでいます。植物考古学・民族植物学の研究や文献の分析も進んでおり、この地域のインダス文明期の環境、生業システム、そして交易ネットワークの実態が徐々にあきらかになってきています。その結果、当時の栽培植物の分布から

インダス文明が地域的に気候変動の影響をうけた可能性がみえてきました(図3)。

このほかにも、モルディブのサンゴによる当時の海水温、魚の耳石分析による降雨量の復元も進めています。また、ファルマーナー遺跡の墓地からみつかった人骨については、昨年度からあらたにコアメンバーを加え、DNAの分析を行っています。

今後の課題

物質文化研究グループは、発掘資料の分析・整理をさらに進め、プロジェクトで発掘した2つの遺跡についての報告書を作成します。古環境研究グループは、ララ湖のコアの分析結果について2010年にアメリカ地球物理学連合(American Geophysical Union)で発表するほか、ガッガル川周辺やグジャラート州の遺跡にかんする仮説を検証するため、これまでに採取したサンプルを分析し、順次発表の予定です。

現在、上記の考古遺物データと古環境の分析データに、栽培植物データ、文献データをあわせ、当時の気候と生業の復元を進めています。今後、空間・時間の二つの軸に沿って4つのグループの研究結果の統合を行い、インダス文明衰退の原因の解明をめざします。

東アジア内海の新石器化と現代化： 景観の形成史

現代の景観の歴史的背景を復元・理解しつつ、文化的景観と文化多様性の保護の指針づくりに向けて活動しています。東アジア内海(日本海と東シナ海)の沿岸を対象に、人間・自然関係の中でも大きな変革が起こった新石器化と現代化の時期に注目します。沿岸諸地域の景観がどのように形成され、どのような方向に向かおうとしているのか、人間文化の側面に焦点をあてながら解明します。



■プロジェクトリーダー
内山純蔵 総合地球環境学研究所准教授
1967年生まれ。東京大学文学部卒業(1991)、英国ダーラム大学大学院修了(1996)、京都大学大学院人間・環境学研究所博士課程学位取得退学(1997)。博士(文学)。富山大学人文学部講師(1998)、助教授(2001)。2003年より現職。専攻は、先史人類学。

■コアメンバー
安室 知 神奈川大学大学院歴史民俗学研究所
飯田 卓 国立民族学博物館
池谷和信 国立民族学博物館
中井精一 富山大学人文学部
中島経夫 総合地球環境学研究所
中村 大 総合地球環境学研究所
春田直紀 熊本大学教育学部
深澤百合子 東北大学大学院国際文化研究科
榎林啓介 総合地球環境学研究所
BAUSCH, Ilona ライアン大学考古学

KANER, Simon セインズベリー日本芸術文化研究所
金 壮錫 (KIM Jangsuk) 慶熙(キュンヘ) 大学校歴史学部
LINDSTRÖM, Kati タルトゥ大学記号論学部
POPOV, Alexander ロシア極東国立総合大学考古学・民族学博物館
ZEBALLOS, Carlos 総合地球環境学研究所
小山修三 総合地球環境学研究所
瀬口眞司 滋賀県文化財保護協会
細谷 葵 総合地球環境学研究所
GILLAM, Christopher サウスカロライナ大学

研究の目的

「景観」とはなんですか。それは、ただ目に見える風景のことではなく、その風景を生み出した文化や価値観をも含み込んだ大きな動きと考えられるようになってきています。たとえば、人はその価値観や世界観に沿って周囲の環境を作り替え、ある風景を作り出しますが、その風景は、次の世代に影響を与え、新たな文化やアイデンティティ、世界観からなる「心の風景」を生み出します。そしてそれは、次の新しい環境開発につながります。「景観」は、目に見える風景と心の風景、そしてこれらの相互作用全体を意味する言葉であり、地域を越え、時代を超えて変化し、人間の営みと文化を表現し続けるダイナミックな現象なのです。あらゆる環境問題は、日常の生活から生まれますが、「景観」は、日常そのものの舞台であり、日々生まれ、変化していくものです。環境問題がなぜ生じるのか、その

鍵が、景観の動きのなかにこめられています。

近年、「文化的景観」の概念とその保護は、国際的な文化多様性の危機に対処する上で重要になっています。たしかに、グローバル化が進む中、世界のあらゆる場所で、伝統文化に培われた独自の景観が急速に失われつつあります。しかし、一方で、社会や文化との結びつきが失われているにもかかわらず、特定の景観を伝統的で持続的なものとして理想化し、莫大な資金と努力を投入してまで復元・維持しようとする例も増えています。私たちはまさに、景観の危機といえる問題に直面しているのです。この危機を乗り越えるために、景観がどのように変化し、形成され、価値を与えられるものなのか、その文化的な過程とメカニズムを理解することが必要になっています。

本プロジェクトでは、日本海と東シナ海を、歴史を通じて豊かな文化多様性を育んできた東アジア内海としてとらえ、この海を取り巻く沿岸のさまざまな景観が、氷河期が終了



図1 プロジェクト組織体制と東アジア内海の8調査地域

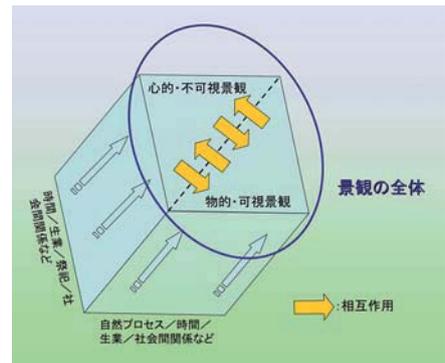


図2 景観の概念

「景観」=物的要素+非物的要素(Based on Keisteri and Sooväli)



写真1 岐阜県・白川郷合掌造り集落

山村生産物の交易により形作られた景観は、いまや伝統的農村景観として、観光の対象となっています

した1万数千年前後、新石器化と現代化という大きな変化の時代を経て、現在の姿に至ったと考えています。人びとが景観を大きく変えるとき、いったい何が起きるのでしょうか。私たちは、東アジア内海を舞台に、景観の本質を理解し、景観の危機の解決に向けての提言を行うことを目的としています。

主要な成果

本プロジェクトでは、東アジア内海の景観史上重要な8つの地域ごとにワークグループを作って現地調査を進めています。各地での調査は、現在までの議論を通して浮かび上がってきた、東アジア内海全体の景観形成において注目すべき4つの共通テーマ（農耕の拡大・導入、水辺をめぐる景観変遷、移民と植民地化による景観変化、景観の精神的イメージの移植と創造）の地域性に即して実施しています。その中で、現在、プロジェクト全体として重点的に取り組んでいる課題のうち、(1)新石器化から見た現代化、(2)内海が果たしてきた文化的機能についての研究成果のいくつかを紹介します。

長期的な歴史の中で、現代の景観変化はどのように考えられるのか。これまで、このテーマについて、さまざまなシンポジウムや学会などの機会での集中的な議論を行いました。従来、新石器化については、大規模な集落や農耕社会の出現などで、比較的短期間に「新石器革命」として現代の基本となる景観要素が誕生したと考えられていました。しかし、それ以前の狩猟採集社会においてもすでに環境開発の大規模化や栽培・家畜化がみられるなど、一連の変化が始まっており、新石器化はむしろ氷河期が終了した後に出現した新たな環境に人間が適応する過程として考える必要があります。長期的には、氷河期以後、景観は大きな変動の過程にあり、「現代化」もその最終段階、いわば「新石器化」のクライマックスとして考える必要があります。

海は、移民や交易を通じて、新たな景観を持ち込み、それが良きにつけ悪きにつけ在地の景観に大きな影響を与えます。例えば、近代の北海道では、海から渡ってきた近代的な都市景観のインパクトが、新たな聖地の誕生など、アイヌ社会の景観に多大な変化をもたらしました。また、海は互いを隔て、その土地



写真2 ロシア沿海州・ボイスマン貝塚(5千年前)での調査

新石器化によって現れた定住という生活様式は、現在の景観の基礎となっています

独自の景観形成を促す役割を果たす一方、逆に陸続きの隣り合った社会の場合、景観形成において継続的な影響が相互に及びます。ロシア沿海地方では、遠方から到来したヨーロッパ社会の影響と同時に、隣り合った朝鮮半島からの移住によりもたらされたさまざまな要素が、集落の形などに大きなインパクトを与えました。

以上のような成果は、景観の保護のあり方を考えるとき、その土地の歴史的背景の理解が不可欠であることを私たちに教えてくれます。

今後の課題

景観形成史を可視化することで、私たちの研究を多くの方がたに理解していただきたいと考えています。本プロジェクトの柱のひとつとする景観に関するデータベース作成と解析をアトラスとして出版する予定です。「新石器化」と「現代化」の異なる時代の景観をひとつのマップに載せることで、これまでと違う人と自然とのあり方が発見できる、世界的にも初めての試みです。今後さらに、景観形成のストーリーを、どなたにも分かりやすく見ていただき、環境問題に新しい認識を持ってもらえるように研究を進めます。

国際的な共同研究にも積極的に取り組んでいます。とくに、研究成果の北海・バルト海地域との比較に向けて、エストニア、ベルギー、オランダ、英国、ドイツなどヨーロッパの研究者との協力関係を築いています。とくに、ロシア極東国立総合大学と英国イーストアングリア大学との間に研究協力の関係を結びつつ、活動を行っています。

メンバーは原則として複数のワークグループに所属し、さらに各地域で歴史的地誌情報と自然地理・考古学情報のGISデータベースを作成するなど、研究成果の統合に向けて、地域間/時代間の情報の交換と比較を行っています。研究所内では、定期的に調査活動と景観研究に関する理解を深めるための公開セミナーを開催しています。今後は、このような活動を継続しながら、研究成果を、学会やシンポジウムばかりでなく、出版や小学校の環境教育への参加などを通じて、広く一般社会に訴えていきます。

地球環境の今

その4



インド、アルナーチャル・プラデーシュ州の焼畑耕作民のニシ族は、最近になって水田稲作を導入しましたが、水不足のため田植えが遅れることもあります 撮影：小坂康之



能登輪島の白米千枚田。海岸沿いの急斜面に2千枚を超えるという小さな水田が階段状に連なる景色は、まさに絶景。写真は、田植えの頃のものです 撮影：進藤健司



アルジェリア、サハラ砂漠ですれ違った年代物の日本車。リアサスペンションが折れていましたが当て木で修理して走り去って行きました 撮影：石山 俊



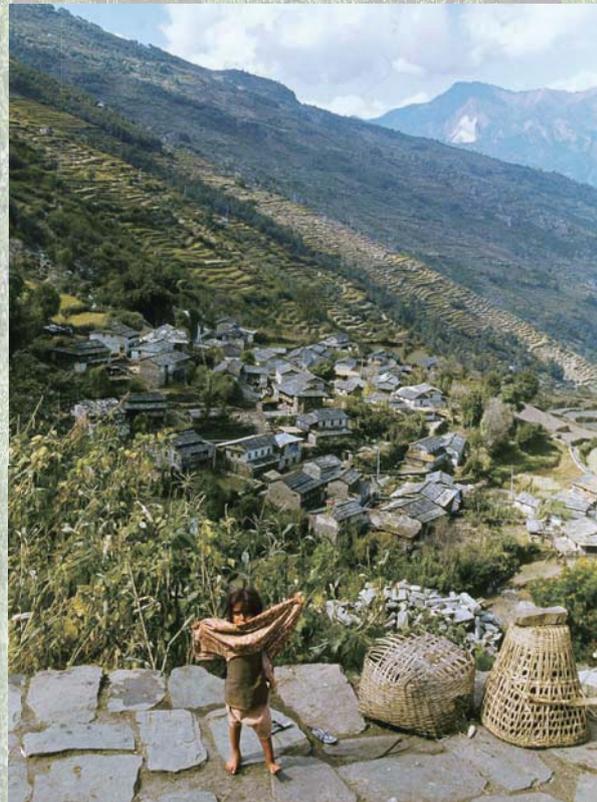
タンザニア、キルワ島への嫁入り。島外から嫁いでくる花嫁は賑やかな演奏とともにダウ船でやってきます。船着場は出迎えの人びとであふれます 撮撮影：中村 亮



ロシア、シベリアにて。冬に見立てた人形を焼き、歌いながら冬を送り出す祭り。これが終わると春が訪れます 撮影：藤原潤子



サウディ・アラビア首都リヤドで開催されたラクダ・レース会場にて。「ポスト石油時代」にアラブ社会の人びとは、どう生活していくのでしょうか？ 撮影：縄田浩志



ネパールの山村の棚田。この棚田もかつて日本がそうだったように、若い人が都会に出て集落に働き手が少なくなり、今は維持されなくなってきたと聞いています 撮影：阿部健一